

第5分科会（広島県）

片づけから幼児教育を考えてみる

指導助言者：岡花祈一郎（福岡女学院大学）

発表者：小谷加奈（かえで幼稚園）

石岡志織（すばる幼稚園）

武田由香（府中すばる幼稚園）

中村有希（安田女子短期大学付属幼稚園）

田中恵里（安田女子大学付属幼稚園）

1. 発表の概要

1) 研究の経緯と目的

私達は、研究会メンバーで集まった時に、それぞれの園やクラスの様子、日々の悩みについて語り合う中で、日々の保育についての悩みや不安が多くあがった。職場での人間関係や、子どもへの声かけの仕方、行事の立案や運営の仕方への戸惑い、日々の記録や学期・年度末の記録の書き方が分からない、絵本や手遊び・製作のアイデアなど保育者としての技量がないこと、など、2年目から5年目の経験が少ない保育者ならではの悩みが多く出てきた。メンバー全員が共通して感じたのは、声かけの仕方の難しさであった。



そこで、保育の中のどの場面で声かけの難しさを感じるのかを考えると、共通して出てきたのが「片付けの時」だった。さらに話し合いを進めていくと、片付けの難しさは声かけだけではなくことが浮かんできた。研究会のメンバーの片付けに対して抱えていた悩みは、命令口調で声をかけてしまいがちになること、子どもによって片付けに対する意識に差があることなどだった。すると、大人と子どもに片付けに対する意識の違いがあるのではないかと、片付けを通して子どもが学ぶこと、身につけることはどのようなことがあるのかなど、片付けに対する素朴な疑問もいくつか出てきた。

そこで、これからの研究を進めていく上で、以下の3つの研究の目的を定めた。

- ①子どもにとっての片付けの意味とは何か
- ②遊びと片付けには関係性があるのではないかと
- ③子どもにとって片付けやすい環境とはどのようなものか

研究会のメンバーは様々幼稚園から集まっている。研究の目的を達成するために、それぞれが各園で実験や事例の収集を行い、それらを研究会に持ち寄り、メンバー全員で分析や考察を行ってきた。以下では、研究会で議論した事例のなかから、5つの事例をとりあげ考察する。

2) 実践事例の検討

【事例1】テーマ「片付けの合図を出さなかったら、子ども達はどうするのか」

対象年齢 3 歳児 16 名、日時 2015 年 2 月の午前中である。

クラスの背景は、室内の自由遊びである。普段は片付けの合図を伝えて片付けるが、この日は片付けを言わずに遊びの設定を行った。

保育者の予想として、子どもたちは遊びを続けるとよそした。

[事例]

開始から 1 時間が経過するまでは片付けのことを忘れて遊びに夢中である。

1 時間 15 分後、給食の配膳台が見えても誰も何も言わずに、遊び込んでいる。

5 分後の 1 時間 20 分後、A 男児が「お片づけの時間だね」と知らせに来た。しかし保育者は「もう片付けていいの？」と揺さぶりをかけて声掛けをした。すると、少し考えてからまだ遊ぶことを選んだ。

1 時間 30 分後、B 男児が「お腹すいたね」と言いに来たが保育者は他児が遊んでいることを伝えた。B 男児は「遊ぶ」こと。選んだ。5 分後の 1 時間 35 分後、B 男児が「片付けよう」と言いに来た。保育者が「他の子に言ってみたら？」と提案し、B 男児自ら伝えて、片付けがスタートした。

[結果と考察]

結果子どもたちは 1 時間 35 分遊び続けた。子どもたちは自身から「片付けよう」「お腹すいた」などの声が上がった。その声かけでは、いつもしっかりしている子ではなく、クラスの中でも低月齢児の男児から発信があり、成長を感じることができた。また、片付けはお腹が空いていたことや十分満足して遊べた為、とても表情よく早く行うことができた。

結果から子どもたちは生活の上で片付けの必要性を感じていた。意欲的に片付けが行えていたのは遊び込むことができていたからだと思う。また、片付けをすることで次の活動に対する切り変えができていた。最後に普段の生活の流れが身につけている為とても早く行うことができた。

【事例2】テーマ「遊びと片付けの関係性～BGM と片付け～」

対象年齢： 満3歳クラス 15名

日時：2014年10月 午前中

[事例]

男女共に活発で、とても明るい子ども達だった。室内遊びでは、ブロックや積み木、糸通し、パズルなどをして遊んでいた。片付ける時間になっても、なかなか片付けをしようとしないうちの子が多く、保育者に言われて仕方なく片づけをすることが多かった。子ども達に対して、意欲的に片づけに取り組んでほしいと感じていた。

ある日、いつものようにブロック遊びをしていた。「そろそろ片付けようか!」と保育者が声をかけると、「はい!」と言って片づけを始める子どももいたが、一方で、全く片づけをしようせず、遊び続ける子ども達もいた。そのため、遊び続けている子どものブロックを、片づけをしている子どもが片づけようとして、トラブルになることが多かった。

別の日の片づけの時間、いつも通り子ども達はなかなか片づけをしなかった。そこでなんとなく子ども達の好きなアンパンマンの曲をかけてみると、子ども達はとても喜んで、普段は片づけをしようとしないうちの子も「あーん、ぱんち!」など言い、飛び回るようにしながら片づけをしていた。保育者が「あんばんまんになってお片付けだ!」と言うと、いっそう張り切って片づけをする子ども達だった。その後、女の子が好きなプリキュアの曲をかけると、プリキュアになりきって決めゼリフを言ったり、ポーズを決めたりしながら意欲的にブロックを片付けていた。

それからというもの、保育者がピアノを弾いて、曲が終わるまでに片付けたり、替え歌を歌ったりして片付けるようになった。

[片付けの様子の変化]

アンパンマンやプリキュアなど子ども達の好きな音楽をかけると、模倣遊びを楽しみながら積極的に片づけていた。その他、保育者が即興でピアノを弾いたり替え歌を歌ったりするとゲーム感覚で、楽しみながら片付けていた。

[考察]

音楽は単なる「片付けさせる刺激」ではなく、「楽しめる雰囲気」をつくりだすものだと考えた。そして、保育者自身も穏やかな気持ちで楽しみながら片付けの援助ができると感じた。

【事例3】テーマ「遊びと片付けの関係性～パクションロボ～」

対象年齢年少組3歳児

日時は2015年3月。

背景は部屋での片付けのときの姿。

[遊びの経緯]

この事例でまず中心となる、Sくんについて述べたいと思う。彼は、入園当初から遊ぶことがとにかく大好き。片付けの時間になっても自分のペースで遊んでいることが多かった。どうしてかたづけなくちゃいけないの？とつぶやくこともあり、自分の遊びが一段落したり、担任と話をしたりすると、納得すると戻ってくることもあった。

様々なことに興味関心、疑問を抱けることができるSくん。空き箱工作が好きで、見立て遊びをよく楽しんでいた。

[事例]

先ほど紹介したSくんが、自由遊びの時間に空き箱工作でロボットを作っていた。

片付けの時間になると、このロボットを作って、パクパクと言いながら、ごみを拾い集めていた。「あ、ここにもあった、どうぞ」と私がSくんに言うと、うれしそうにロボットの口をあけた。

翌日、私がちりとりを用いて「パッケンロボットだよー、何か食べるものはないかなー」と言いながら、片付けの時に部屋の中をまわった。

すると、子どもたちが集まってきてどんどんゴミを拾いはじめた。「モグモグ」「パクパク」「もっと食べたいよう」などと言うと、すかさず子どもたちは、落ちていた物を見つけて、「あったよー。」とのぞきこむようにいれていた。



[気づきと考察]

「あそびながら」ということが一つのポイントであり、Sくんはまた自分で作った物であったので、さらに楽しめることができたのではないかと思う。片付けが、幼稚園生活の一部としてスタートする年少組。片付けはひとつの社会性のルールともとらえることができる。

ルールを伝えるというよりも、スタートとして、片付けも楽しいこと、きれいになっていく感覚などを感じるためには、やはり楽しいことの積み重ねが必要である。片付けは、ちょっとおっくう、苦手、嫌、という先入観を大人も持ってしまうところがある。当然それは伝わっていくのではないかと考える。これからも「あそびが片付けに」を目指していきたい。そして、喜んで片付けようとする保育者の工夫の必要性を感じた。

【事例4】テーマ「遊びと片付けの関係性～年度末の大掃除～」

対象年齢：4歳児 年中組 33人クラス

日時：2015年3月

[事例]

大掃除は学期ごとに行っている。1・2学期は、各コーナーの片付けを、保育者が意図的に決めたグループに任せていた。しかし、年度末の大掃除では、自分達できれいにしたいといけないうところを見つけて片付けるようにとだけ伝えた。

また、大掃除に向けて、前日から「今まで使ってきた自分達の保育室やおもちゃにありがとうの気持ちを込めて片付けをすること」「新しい年中組のためにいつも以上にきれいにしよう」と話をしていた。

保育室にはいろいろなおもちゃのコーナーがある。その中でも3つのおもちゃの片付けの様子に注目してみた。

まずは井形ブロックコーナーである。この井形ブロックは、いつもは衣装ケースに雑然と入れてある。数人の子ども達が集まり、衣装ケースをひっくり返して、片付けを始めた。すると子ども達同士で、「同じ形と色のブロックを重ねよう！」という話になり、ブロックを集める子ども、積み重ねる子ども、指示を出す子ども…と、役割分担をして片付けが進んでいった。その様子を見ながら私は、「積み重ねても、いつかは倒れるだろうな…」と感じていた。少しずつブロックが積み重なってくると、「倒れないように押さえてね」など、友達と協力しながら片付ける様子が見られるようになった。上手に積み重ねられていく様子に、私は、「いつまで続くんだろう」と、期待を込めて見るようになった。その後、他のコーナーの子どもの様子を見て回り、井形ブロックコーナーに戻ってくると、いつもの雑然とした片付け方に戻っていた。「あれ？いつの間に？楽しみにしていたのに！」と思いい、子ども達に聞いてみると、ある女兒が「だって、崩れるんじゃもん。いいんよこれで。」と一言。その一言に驚かされましたが、子ども達なりに試行錯誤して導き出した、井形ブロックの片付け方なんだろうと感ずることができた。



次に、レゴブロックと積み木コーナーである。レゴブロックコーナーには、ブロックを入れる箱が3つありますが、どの部品をどの箱に入れるのか、特に決まりを作ったり、絵表示で示したりしていなかった。しかし、大掃除開始と共に集まってきた子ども達は、「この箱にはタイヤを入れよう」「こっちはレールを入れよう」など、自分達で種類を分けながら片付けを行っていた。積み木コーナーには、積み木を入れる箱が2つある。その箱にすべての積み木が上手にはまるよう、子ども達は友達と意見を出し合いながら型はめ遊びのように片付けを楽しんでいた。

[考察]

以上の片付けの様子から、なぜ子ども達は楽しみながら片付けをしていたのか、ということ考察すると、3つのことが明らかになった。1つ目は、学年末の大掃除をするにあ

たって、1年間の感謝の気持ちをもって片付けをすることや、進級する喜びなど、学年末の大掃除だけの特別感を子ども達を感じ取り、味わっていたからではないかということ。2つ目は、井形ブロック・レゴブロック・積み木、それぞれのおもちゃの特性によって、面白さの要素が違うことを、1年間の遊びの経験の中で理解していたためということである。井形ブロックには、友達と役割分担をすることや、倒れないように積み上げるというスリル感を、レゴブロックでは、ブロックを自分達で分別しながら3つの箱に入れていくこと、積み木では、友達と一緒に試行錯誤をしながらパズル感覚で行うこと、を、それぞれ楽しんでいた。これは、3月という年度末に行ったからこそ見られる姿だと思う。これまでの遊びの経験があったからこそ、子ども達は楽しみながら片付けをしていたのだと考えた。

そして最後に、この事例では、保育者は「大掃除」という片付けの活動として子どもたちに提供したのに、子ども達は「遊びながら」大掃除を進めていくという姿があった。このことから、片付けが遊びとして展開していくこともあることに気付いた。

【事例5】テーマ「めあてをもって片付ける」

年長組の9月：作品展に向けての取り組みの中でのエピソードである。

空き箱を組み合わせて遊園地づくりをしていた。これに使う材料(お菓子の箱、ティッシュの箱、リボン、牛乳パックトイレットペーパーやラップの芯、プラスチック容器など)は、保護者に依頼し、家庭から子どもたちが持って来たものである。

〔事例〕

家庭から持ってきた材料は、いくつかの大きな段ボールに分別せずに入れていた。はじめ、子どもたちは、段ボールの中からイメージした大きさや形の材料を探して作っていたため、作ることも探すことに時間がかかっていた。

そのため、次第に遊園地づくりへの意欲も薄れ、取り組む姿も少なくなっていた。片付けの時間においても、箱が床に落ちたままになっていたり、使いかけの箱もそのまま入れるだけになったりしていた。材料はどんどんボロボロになり、子どもたちの廃材に対する扱いも雑になり、関心の薄さから片付ける時間もかかるようになっていた。

そこで、教師が種類別に廃材分けをおこなった。それぞれの段ボール箱には、『おおきなほこ』『ちゅうくらいのはこ』『ちいさなほこ』『プラスチックカップ』『芯』などと表記をした。すると、子どもたちは、「大きさが違うから探しやすくなったね!」と言って、遊園地づくりに必要な箱の大きさを考えながら探しに行くようになった。家庭から持ってきた材料も、「これはおおきな箱かな?」「これはカップのところだよ?」と、箱の大きさや



種類を意識して、教師や友達と相談しながら片付けるようになった。また、家から持ってきた材料も種類別に分けながら入れるようになった。遊園地の製作中も自分がイメージする箱がどこにあるのかが分かるため、活動もスムーズになり、遊園地づくりに取り組む子どもたちも増えた

[考察]

はじめは、多くの子どもたちが、箱の大きさを確認してくるため、“箱の大きさに正解はないから、どの大きさの箱のところでもいいんだけどな”、と教師自身思っていたが、子どもたちは、子どもたちなりに大きさを考え、“種類別に片付けよう”というめあてをもって片付けているのではないかと思った。箱を大きさ別にわけて以降、自ら箱を手に取り、分別して片付ける姿が増え、片付けにかかる時間も短くなった。つまり、保育者が環境を工夫すると、子どもたちもその意図をよみとり、片付けに“めあて”をもち、意欲的に片付けるようになるのではないかと考えた。保育者自身、どのような“めあて”をもって片付けるか、考えることが大切であると感じた。

【総合考察】

以上の実験・事例を、はじめに定めた3つの目的と関連させると、このようになる。

1つめの、“子どもたちにとっての片付けの意味”は、実験事例から、子どもたちも片付けの必要性を感じていることが明らかになった。“片付けましょう”と言われてから片付け始めるまで、誰しも“まだ遊びたい”“ここまではやりたい”“ここまでできたら片付けよう”などの思いがあるだろう。そして、出した物・遊んだ遊具は、元の場所に戻すということ伝えてある。つまり、片付けは、前の活動との気持ちの切り替えをつけるものでもあるということを実感した。

2つめの、遊びと片付けの関係性については、BGMをかけた時、パクンロボ、年度末の大掃除の事例から、“遊びがきっかけとなり意欲的に片付ける”“遊びながら片付けを楽しむ”ということが明らかになった。BGMがかかっている空間で片付けを楽しむ子どもたちの姿から、片付けの時も自由な遊びの時間と同じように、楽しい雰囲気をつくるのが大切であることを感じ、心がけていきたいと思った。

パクンロボの事例では、“子どもの興味関心がある遊び”と“片付け”という活動の架け橋となる遊びを保育者がつくり、それがきっかけで楽しみながら片付ける姿があった。

年度末の大掃除の事例では、何気ない片付けの様子でも、視点を変えると、遊びとなっていることに気づき、これらの事例からも、子どもたちは、片付けがひとつの遊びとなっており、面白さや楽しさを感じながら片付けをしていることが分かった。

さらに共通して言えることは、子どもたちが楽しんで片付けをしていた背景として、保育者や友達など『人的環境』とのかかわりがあったということである。幼稚園などの集団生活の中では、保育者や友達と一緒に、あるいは、保育者や友達の言葉かけに刺激を受け

で活動をしていることが多くある。片付けにおいても、活動がスムーズにおこなわれるのは、片付けの習慣が身に付いているだけでなく、そのクラスでの友達とのかかわりが深まっていることや、保育者との信頼関係が築けていることもひとつの理由であるのではないかと考えた。

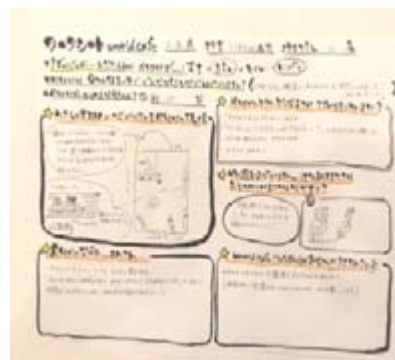
3つめの子どもにとって片付けやすい環境については、遊園地づくりの事例より、保育者が“遊びやすいように”あるいは“片付けやすいように”と、見てわかるような環境の工夫をしたところ、子どもたちもその環境の変化の意味を考え、子どもたちなりに、めあてをもって片付けていることが明らかになった。一つ一つの遊具や道具の扱いや遊び方をふまえた上で、どのような環境を用意することが適切なのかを考えながら、物的環境を工夫していくことが大切であると感じた。

今回研究していく中で、園によって、個人によって、家庭環境によって“片付けに対する価値観の違い”があることがわかった。そのようなこともふまえ、今後の課題は、『片付けに対する意識の差は何なのか?』ということと、『片付けやすい環境の工夫』をこれからも継続していくことである。

3) ワールドカフェ

ワールドカフェとは、知識や知恵は機能的な会議で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことができる「カフェ」のような空間でこそ生まれるという考え方に基づいた話し合いの手法である。

私達は、研究会の集まりを通して、日々の悩みや不安を話したり、それについてアドバイスを受けて共感してもらったりすることで、自分の保育を見つめ直すことができた。この分科会の参加者にも、「片付け」に対する悩みや自分が工夫しているところ話すことで、思いに共感したり新たな発見をしたりしてほしいという思いから、ワールドカフェを取り入れた。また、図1のようなワークシートを用いて話し合いをすることで、自分の保育を見つめ直すきっかけとしたり、持ちかえって園内研修に役立てたりしてほしいという願いもあった。ワールドカフェ中は、BGMを流したり、お菓子を配ったりして、できるだけリラックスした雰囲気の中、カフェに来たような気分で話し合えるように工夫した。



*ワールドカフェの感想

「いろいろな園の環境が見れて勉強になった」「仕分けをせずに片付けている園があつて、反応に困った」「一人ひとりにかわいいカップに入ったおやつがあつて、話しやすい雰囲気だった」「園の形態によって片付け方が全然違うことが分かった」「ワールドカフェで話し合ったことと、パワーポイントでの発表を関連づけて考えることができた」などの声が寄

せられた。

2. 指導助言者のコメント

岡花祈一郎（福岡女学院大学）

今回の実践研究の大きなテーマは、「子どもにとっての片付けとは何か」という点を探求していくことだったと思う。一般的に、保育者は自らすすんで片付けてほしいと感じるのに対して、子どもは片付けたく無い（もっと遊びたい）という思いとの葛藤場面になる傾向にあると思われがちである。しかし、今回の発表のなかで、「楽しみながら片付ける子どもの姿」が多くみられた。

なぜ楽しみながら片付けることができたのか。その理由は環境構成への工夫配慮、そして遊びと片付けのとらえ方を保育者が切り替えたからだと思われる。ここで片付けを理解する枠組みを図にして考えてみたい（図1を参照）。一番重要なのは、子どもの心情を理解することを中心に置くことだろう。例えば、子どもがなかなか片付けてくれないときに、今この瞬間、なぜ子どもは片付けたくないのだろうと、保育者自身が立ち止まって考えることが大切である。子どもの思いに寄り添えず、保育者の都合で「片付けさせる」ことになると保育場面で子どもと対立状態になってしまう。さらに、子どもの心情を理解するときに、次の三つの視点からとらえると良いと思われる。



図1 片付けをとらえる枠組み

第一は、時間軸である。子どもにとっての時間と、保育者からみた時間は異なる。どうしても保育者は「次の活動」といって、未来を強調してしまう傾向にある。しかし、子ど

もにとっては「遊んだこと（過去）」をきちんと受け止めてもらえないと次の活動には移りにくい。遊んだことの面白さや楽しさを保育者やクラス全体で受け止めることで、初めて次の活動に移ることが可能なのである。第二は、物的環境である。保育者が片付ける環境を工夫することで、子どもが片付けやすくなることがある。イラストやマークなどを棚に貼ったり、牛乳パックなどの廃材は大きさを揃えて分類してみたりするなど、物的環境への保育者自身の配慮によって子どもの片付ける意識に影響を与えるのである。第三とは、人的環境である。片付けにおいても保育者の存在は大きいものである。保育者の言葉がけひとつで、子ども自身が楽しみながら片付けが進むことも多い。保育者自身が片付けのモデルとなることも必要だろう。以上のような枠組みでとらえたとき、「子どもに片付けさせる」から「一緒に楽しみながら片付ける」という意識に少し変えていくことが可能なのではないだろうか。